

500号に達した「天文ニュース」とその背景

長 沢 工

〈文部科学省・国立天文台，天文情報公開センター・広報普及室 〒181-8588 三鷹市大沢 2-21-1〉

国立天文台・広報普及室で毎週発行している天文ニュースは、累積で500号に達した。この機会に、天文ニュース発行にいたるまでの経緯、その後の経過、編集の内幕などを述べ、また、種々の問題点や今後の見通しについても報告する。

1. はじめに

2001年11月29日に、国立天文台・天文ニュースの発行が500号に達した。500号は、山形の板垣さんが、彼にとって今年2個目の超新星を発見した記事であった。

国立天文台・天文ニュース（以下、天文ニュースと呼ぶ）をご存じでない方も多かろうと思われるが、これは国立天文台・広報普及室ではほぼ毎週木曜日に発行している、天文に関するニュース速報である。そのとき、そのときに応じて、天文に関係するさまざまな情報を、ひとつの話題に対して1200字程度にまとめ、毎週一つか二つ、ときには三つのニュースを発行している。これらのニュースの内容は、国立天文台のホームページで見ることできるし、FAXで取り出すこともできる。電子メールでの自動配信もおこなっている。誰でも見ることができるし、利用や転載もほとんど自由である。この天文ニュースの累積号数が500号に達したのである。多少キリのいい数字であるというだけで500という数に特に意味があるわけではないが、ここで、天文ニュースについて、その発行のいきさつや、それにまつわる裏話などを紹介しよう。

2. 天文ニュースのこれまで

天文ニュースの第1号は1995年10月5日に発行され、その内容は「149年ぶりに発見されたドビ

コ彗星」というものであった。それ以来天文ニュースは、彗星、新星、衛星、系外惑星などの新天体の発見について、あるいは宇宙探査機で得られたさまざまな知見について、また流星群の出現や日月食、星食について、さらに、もっと身近な暦についてなど、天文に関するさまざまな話題をお知らせしてきた。自画自賛であるが、これまでの500号の中には、最初の系外惑星の発見（天文ニュース3号）、褐色わい星の初めての確認（同8号）、ガンマ線バースト残光の最初の確認（同93号）など、非常に重要な発見を、かなり早い段階で皆さまにお伝えできたと思えるものもある。また一方、「内容が間違っている」、「説明が不十分だ」、「こんなことを書かれては困る」など、お叱りを受けたものも数多い。

天文ニュースは国立天文台の名のもとに発行されているものであるから、国立天文台の先生たちが検討の上で出されていると皆さんはお考えであろう。そうであることを期待されているかもしれない。しかし現実はそのようではない。ここではっきり述べておこう。天文ニュースの95パーセントは、私が、つまり広報普及室の長沢が独断で選び出し、勝手に文章にしたものにすぎない。私が天文学の全体を把握しているわけではないので、取り上げる内容にはどうしても自分の好みが入り込む。「内容に偏りがある」ともいわれるが、そんなところからであろう。このようにほとんど個人的に天文ニュースを

作っていることに批判はあろうが、ここでは、他の方々からの積極的な協力が無い限り、天文ニュース発行を続けるには、いまのところ個人的な努力以外に方法がないことだけを述べておこう。

天文ニュースの内容をどのように選び出しているのかに関心を持たれる方があるかもしれない。天文ニュースの原稿を作るために私が必ずチェックするのが、最近に出された国際天文学連合回報 (IAUC) と小惑星電子回報 (MPEC), そして週刊の科学雑誌ネイチュア (Nature) とサイエンス (Science) である。これらに面白そうな記事がないかと目を通す。また、アメリカ航空宇宙局 (NASA), ジェット推進研究所 (JPL), ヨーロッパ南天天文台 (ESO), ヨーロッパ宇宙機構 (ESA) その他のホームページにもしばしばアクセスして興味を引きそうなニュースを探している。場合によってはアストロフィジカル・ジャーナル (ApJ) のレターズやサイエンティフィック・アメリカン (Scientific American) などの記事も拾い読みする。もっと手広く調べた方がいいのであろうが、毎週、実質的には二、三日しかない期間にできるのは、これが限度である。それらの記事の中から、なるべく新しく、一般の人にたやすく理解できそうな話題をいくつか探し出すのである。

そこにこれならと思える題材があれば、その内容を詳しく読み直し、できるだけ自分で理解し、それを天文ニュースの記事にリライトする。これが原稿を作る通常の手順である。私がひとりで奮闘するのは、記事を書き、それをテキストファイルにしてフロッピーディスクに保存するまでである。それを国立天文台のホームページに貼り付けるなど、その後の面倒なことはすべて広報普及室の並木さんがやってくれる。天文ニュースが現実には人の目に触れるようになるには、並木さんの力が大きい。原稿にするまでに私は、図書室まで何度も往復していくつかの関係文献に当たったり、確認のため少し自分で計算をしたりすることもある。ほんの一、二回、はっきりしない内容について、当事者に電

話で問い合わせをしたこともあった。よいニュース記事を作るためには、その内容に関して関係者から話を聞くといいことはわかっているが、いまのところ原則として積極的な取材はしていない。時間的に、労力的に、その余裕がないからである。したがって、発行されたほとんどの天文ニュースの内容は、一旦発表され、何らかの形で記事になったものの焼き直しである。このような形になったのは、それなりの歴史的経過もある。ここで、天文ニュース発行にいたるまでのいきさつをたどってみることにしよう。

3. 天文ニュースの発行まで

天文ニュースの発行を述べるには、その前に出されていた「天文情報レター」について触れずには済まされない。ほんの一部の方しか記憶されていないだろうが、「天文情報レター」は、科学館、プラネタリウムなどに一時期、国立天文台から配信されていたニュースレターである。

定年で地震研究所を退職した私が広報普及室の前身である国立天文台の天文情報普及室に非常勤で働くようになったのは、1993年4月からである。そこで質問電話の対応をしていた私に、「日本各地のプラネタリウムや科学館などに対し、天文に関するニュースを適宜出してもらえないか」と、当時の磯部室長が依頼してきたのである。

このとき、私はすこぶる簡単に考えていた。「国際天文学連合回報を見て、新彗星の発見などを適当に拾い出せばいいだろう」という程度のことしか頭に浮かばなかった。「それも面白いか」と、勝手に「天文情報レター」と名付けて、とにかく私はやみくもに始めてみることにした。

こうして天文情報レターの第1号は1993年6月始めに発行された。その表題は「木星に衝突するシューメーカー・リビー彗星」で、翌年7月の衝突を予告したものであった。私はこれをプラネタリウム関係の多少古いリストをもとに郵便でやたらに送り出し、「引き続き送付を希望する場合は申込書

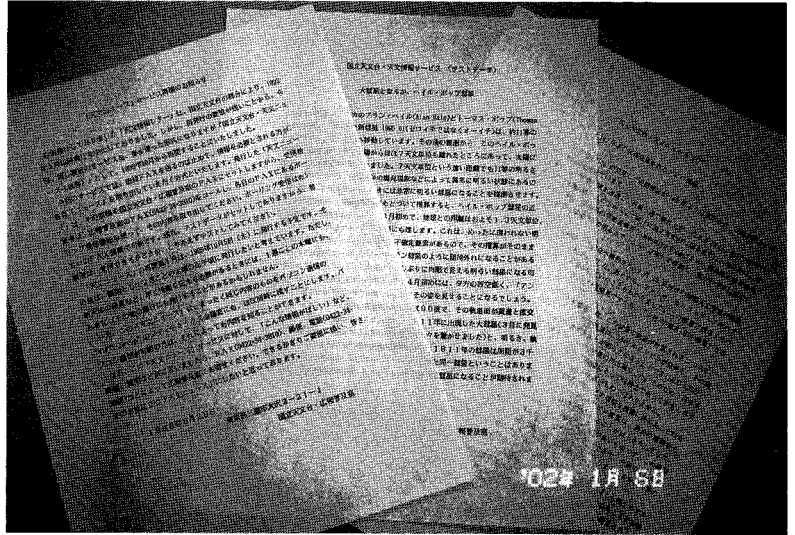
を送れ」と申込書を添えた。また次号からは、郵便ではなくFAXで送ることも予告した。

これに対して74ヶ所から申し込みが来た。そのうち6ヶ所は「FAXがないので郵送してほしい」というものであった。これに基づいて、6月28日に第2号の「小惑星1993 KA2, 地球に大接近」を出し、以下、隔週程度にこの情報レターを出した。それらのレターの中には、1992 QB1に続く第2のカイパーベルト天体の発見を報じたものや、探査機ガリレオが小惑星イダの衛星を発見し

たなどの記事がある。この間、「これを天文情報レターに出したらどうか」という情報提供も少しはあったが、具体的な文章はすべて私が作った。情報レター配布の話聞きこんで新たに申し込みをして来たところもあり、配信先はやがて80ヶ所余りに増加した。このときはFAXを送るのに時間がかかるのに閉口した。パソコンFAXで自動的に送る方法であり、付き切りになる必要はないのだが、80ヶ所余りに送るのに2時間以上かかった。郵送はちょっと手間がかかりすぎるので、申し訳なかったけれど、途中で送付を丁重にお断りした。

この天文情報レターは1994年3月25日に22号を出して打ち切りになった。これは組織替えて天文情報普及室が廃止になったためである。天文情報レターを出したのは1年足らずの期間であったが、この間に、レター発行は当初考えていたよりはるかに大変な仕事であることがわかってきた。また、この間に聞かされたさまざまな意見や感想から、天文情報を流すことの問題点について、私はいろいろ考えさせられもした。そして、中止になったことで、正直のところほっとした。

1994年4月から天文情報普及室は「広報普及室」



天文ニュース サービス再開の通知~天文ニュース テスト版と1号

に組織変えになり、天文情報レターのことは忘れて、私はまた質問電話や質問手紙の対応に追われる身になった。しかし、秋風の吹くころから、私の耳に「天文情報レターをまた出してほしい」という声がチラホラ聞こえるようになってきた。しかし私は、ずっと聞こえないふりをしてきた。「ニュースを出すのはもうごめんだ」という気持ちが強かったからである。電話の対応なら、何を聞かれてもそのときだけの対応でよく、終わればそれきりである。しかしニュースレターの発行は「つぎには何をニュースにするか」をいつも考えていなければならない。それが辛いのである。

しばらくそんな状態が続いた後、1995年度になって、渡部広報普及室長から「天文ニュースの再発行を考えてほしい」旨の依頼を直接に受けた。室長はあちこちでその種の要望を受けていたらしい。これで聞こえないふりはできなくなった。そこで「ニュースを出すですれば」と、私はかなりいろいろの希望を出した。難しい条件をつければ、やらずに済むかもしれないというかすかな希望もあった。その主要な点は、ニュースを作るために週に一日をまったくフリーにしてもらうこと、こちらから

FAXを送りつける方式を止めること、ニュースを出すのは隔週でいいことなどである。でも、こうした条件を室長がすべてすんなり受け入れてくれたので、私はニュースを出さざるを得なくなりました。これがニュースの再発行に至った本当の理由である。実をいうと、ニュースを私ひとりで書くのではなく、誰か協力者がほしかった。しかしちょっと適当な人が見当たらず、これは言い出さないままになってしまった。

こうした経過を経て、1995年8月10日に第0号のテスト版として「大彗星になるか、ヘイル・ポップ彗星」の記事を出し、反応を見ることにした。その結果、約2ヶ月後の10月5日に、前記の第1号を出したのである。隔週の発行でもいいという約束だったが、当初しばらく毎週出したことにより、特別の理由がない限りその後には休みの週を作りにくくなって、結局ほとんど毎週出すことになってしまった。日本人による新彗星の発見など、急にお知らせしたいニュースがあるときは、渡部室長や並木さんが記事を書き、木曜以外でも出してくれる。週に2回しか出勤しない私にとって、これはたいへんありがたいことである。始め、このニュースに何かうまい名前をつけてほしいと室長に依頼したが、特別の返事はなく、私が適当に「国立天文台・天文ニュース」と名をつけてしまった。しかし、別に出されている「国立天文台ニュース」とまぎらわしく、よい名ではなかったと反省している。

4. 天文ニュースに対する反応

天文ニュースを出し始めてしばらくの間、このニュースがどのくらい読まれているのか、関係者の間でどのくらい活用されているのか、ほとんどわからなかった。天文ニュースを出すのは暗闇に手探りで鉄砲を打っているようで、まるきり反応が感じられないのである。このような時期がしばらく続いた。

仮に「天文ニュースをどう思うか」という形で

直接にアンケートをとるとすれば、「たいへん役立っています。これからも続けてください」といった紋切り型の回答が来ることは見え透いている。それでは面白くない。天文ニュースに関する本音の感想が聞けないだろうかと、よく私は考えた。それが多少なりともわかってきたのは、私にとって思いがけないところからであった。

毎週天文ニュースの原稿を書いていると、その中にしばしばミスが入り込む。数字の桁数をまちがったり、漢字の変換ミスが残っていたりすることがある。内容を誤解して書くこともある。私がオッチョコチョイのせいもあるだろうが、いくら気をつけても、ときにこうしたミスが起こるのは避けられない。すると、そのミスや誤解に対する指摘や苦情が、電子メールや手紙で舞い込むようになったのである。このとき、私はあまり言い訳をしない。たいてい私が間違っているからである。そこで安っぽくべこべこ謝って、次の号の天文ニュースに訂正文を載せる。こんなことを繰り返しながら、私はミスの指摘を、確かに読者がいるという感触でとらえていた。あるとき、とあるプラネタリウムで、聴覚障害者のために字幕つき投影をしたニュースを知った。ろくに調べもせずに私はこれを「字幕つきの投影は日本で初めて」と天文ニュース(201号)に書いたのである。これに対しては、ほとんど即座にたくさんの苦情が殺到した。「どこそこでは既に字幕つき投影をおこなった」、「字幕つき投影は私のプラネタリウムでもやった」などである。びっくりした私は、陳謝するとともに訂正文を出したが、このとき初めて、プラネタリウム関係者のかなりの人が天文ニュースを読んでいることを確信したのである。ミスを指摘されることは読者のいる証拠であり、読者の存在を信じることは、天文ニュースを書くときの何よりの励みになった。

この他にも、さまざまな指摘や苦情がきた。Hill sphereの訳は「ヒル球」でなく「ヒル圏」とすべきであるなどと、訳語に文句を付ける人もあったし、カナ書きにした外国人名にもしばしば苦情が寄せら

れた。外国人名は一応カナ書きにして、そのアルファベットを括弧に入れて添える形にしている。そこで、たとえば Lagerkvist という名に対し、その読みをラジャークビストと書いたりすると、「それはラーゲルクヴィストが正しい」などといってくる。本当のところ、さまざまな国籍の人がいて、私にはどんな発音が正しいのかわからない。外国人名はいつも苦勞の種になっている。

そのほか、私から見て、かなり無理と思われる注文も多い。「参考文献が不十分であり、当然挙げられるものが漏れている」、「ニュースを出す前に専門家にチェックさせろ」、「国立天文台の活動が無視されているのは理解に苦しむ」などなどである。実のところこれらはまことにもっともな意見であり、実行されれば天文ニュースははるかに充実したものになるに違いない。しかし、忙しいこともあってか、天文ニュース作成に協力してくれる一般の研究者は少なく、むしろ非常に冷淡なのが実情である。これまでに積極的に協力して記事を書ってくれたのは、九州大の山岡さんと、ハワイ観測所の関口さんの二人だけである。何か面白くわかりやすい研究結果があったら、ぜひ提供してほしいのであるが。

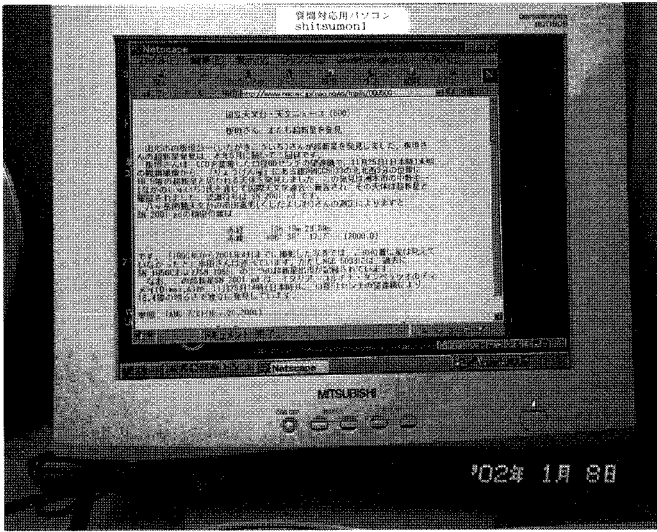
国立天文台の活動についての記事は、私としてはできるだけ掲載したいと考えている。しかし、現実にはなかなか記事を提供してもらえない。ときに情報を手に入れて、頑張って記事にすることもあがるが、そのようなときは文句を言われる確率が非常に高い。「記事を撤回せよ」といわれたこともある。専門家が見ると、局外者の私が要約した内容は意を尽かさず、不十分に感じられるのであろう。それは、ある程度止むを得ないことである。概して身近なところの記事ほど反発を受けやすく、苦情を覚悟しなくてはならない。ただ、この種の苦情は、私に届く前に渡部室長が対処してくれることが多く、私としては大変助かっている。いずれにしてもこのようなニュース記事は、叱られることは多くてもほめられることはほとんどない。

私の理解では、もともとこの天文ニュースは、情報を入手したり、すぐに理解したりするのがむずかしい科学館やプラネタリウムの職員を主な対象としたものであった。専門の天文学者や広く一般の人に読まれることはあまり想定していなかった。しかし、天文台のホームページに掲載されて非常に多くの人の目に触れるようになったため、読者層が当初の意図とは違ってきて、それに対応できるニュース作成が、私ひとりの手に余るものになってきたというのが本当のところである。

5. 天文ニュースから得られる喜び

天文ニュースの執筆は、文句をいわれガッカリすることばかりではない。ときには多少の喜びをもたらしてくれる。記事について「より詳細を知りたい」と連絡してくれる人もあって、天文ニュースが少しは関心を引き、役に立っていると感ずることもある。何かのついでに立ち寄った科学館の壁に天文ニュースが掲示されているのを発見して、自分ひとりで喜ぶこともある。そうしたことの中で、何よりも満足感に浸るのは、いい内容と思える記事を先がけて天文ニュースに取り上げたときである。

先に書いたように、天文ニュースの内容はほとんどすべて、何らかの形でどこかで既に英文の記事になっている。だから、端的にいえば、私の仕事は、英文の記事を日本語に要約して紹介するだけである。そうすると、始めは想像もしていなかったことだが、心の中に、ニュース的な内容をもつ天文記事で、日本の新聞やテレビにまだ紹介されていないものを先駆けて拾い出し、天文ニュースに掲載したいという気持ちが生まれてきた。日本の新聞に掲載された内容を後追いで天文ニュースにしても面白くない。なるべくこちらが先に記事にしたいと考えてしまうのである。一方で、たとえば大新聞とそんなことを争っても勝ち目があるわけではない。そんなことを狙ってしょうがないと考える冷静さもないわけではない。それでも、稀に、天文ニュースに書いた内容を後から新聞が取り上げたり、



天文ニュース 500号

それに関してマスメディアから問い合わせがあったりもする。そんなとき私は、心の中で「やった」と叫んでひとりほくそえむ。これが私ひとりの秘密の楽しみであり、新聞記者がスクープをねらう気持ちの一端がわかるような気にもなった。

6. 天文ニュースの将来

こうして、あれこれ批判を浴びながらも天文ニュースはともかくも500号に到達した。しかし、このままの形でいつまでも続けられないことははっきりしている。まず私自身、今後長期間にわたって天文ニュースを書き続ける気持ちはない。だからといって、いまの私の立場をそっくり引き継いで広報普及室で天文ニュースを書き続ける人があらうとも思われない。だから、私が書くのを止めた時点で天文ニュースは消滅するかもしれない。これまでの天文ニュースの編集形態は、止むを得ずこのようになっただけで、望ましい形とはほど遠い。私が書くのを止めた後も発行を続けるなら、その編集や記事の執筆の形式をかなり変えざるを得ないであろう。つまり、これまでのようにほとんどひとりでネタを探し、勝手に記事をデッチあげるような

ことは止めた方がいい。できるだけ広い範囲から内容の提供を仰ぎ、何人かが交代で原稿を書くといった方法を考えなければならないであろう。これが可能になれば、これまでよりもずっとまじな天文ニュースができるかもしれない。立場はかなり異なっているが、類似した内容の天文ニュースを不定期に出しているところが民間にもある。国立天文台が天文ニュースを出す必要があるか、そこから考えた方がいいのかもしれない。

12月6日の夜、天文ニュースが500号に達したことを祝って、広報普及室を中心とした人々が集まり、祝宴を開いてくれた。天文ニュースの発行号数などには関心がないと思っていた人たちが集まってくれたことに私は感激した。内部的なささやかなお祝いではあったが、私は本当に嬉しかった。そして、5年余りにわたり辿ってきたその道筋を思い、周囲で天文ニュースの発行を支えてくれた人々に感謝した。私の個人的な道楽に近いものではあったにしても、国立天文台の名がついていることから読んでいただいた方々も多いことであろう。それらの皆さんにも心からの感謝を捧げ、さらにまたこれまでの天文ニュース編集の一端を知っていただきたいと思って、私はこの原稿をまとめた。

The Astronomical News and its inside stories

Ko NAGASAWA

National Astronomical Observatory, Mitaka, Tokyo,
181-8588, Japan

Abstract: The Astronomical News is being issued weekly from the Public Information Office, National Astronomical Observatory of Japan. Last autumn, it attained to the 500th issue. Taking this opportunity, we give circumstances just before the first issue, brief history and future prospect of the News.